

浄土

monthly
JODO

令和4年 通巻965号

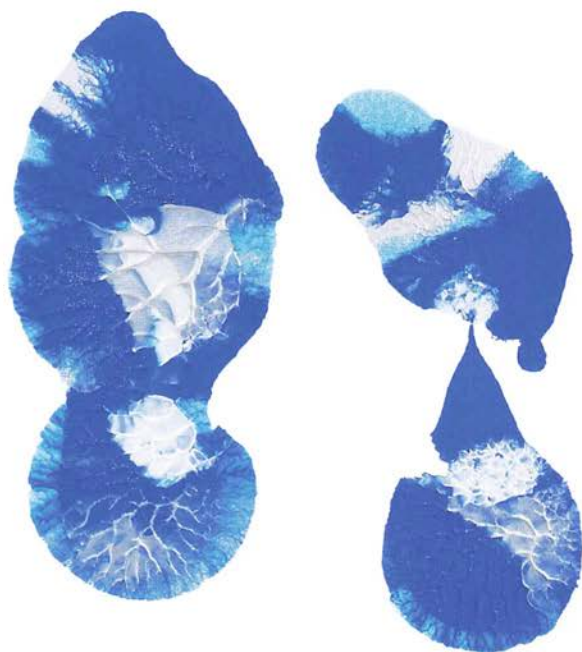
2022

July, August
vol.88
no.965

7.8

[新連載]

開教奮闘記「東京・多摩市 林海庵」 笠原泰淳



ふっふっ放談

特別寄稿

曹洞宗を知ろうその3 関水俊道

専修念佛に生きる 梶田真章

浄土

2022/7・8月号 目次

連載 インド紀行⑳	佐藤良純	1
新連載 開教奮闘記（東京・多摩 林海庵）	笠原泰淳	6
寺々刻々㉒		
『宗教年鑑』で読み解く単立宗教法人化	鶴飼秀徳	11
特別寄稿 専修念佛に生きる 浄土宗と浄土真宗	梶田真章	16
法然上人の言葉④ 『一言芳談』より	阿満利麿	20
微風吹動「名前の話」	工藤量導	24
あなたもお寺のCIO ⑤		
アンゾフのマトリックスとネット広報	小路竜嗣	28
ぶつぶつ放談 曹洞宗を知ろう その3	関水俊道	32
江戸 日本の街道探訪 第16回 甲州街道2	森 清鑑	39
漫画「浄土宗のお祖師様」三祖良忠上人⑫	ぐんじまん	48
みんなの境内 祈り「浄土に響く典雅なるも」	平井泰代子	51
編集後記		56
表2 古物漂流⑯	三宅政吉	



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙絵＝清岸寺第四十四世 原口正弘

アートディレクション＝近藤十四郎

開教奮闘記

1 新寺建立の候補地はどこに

林梅庵開山上人

笠原泰淳



かさはら たいじゅん
昭和三十三年東京生まれ。慶応大学経済学部卒。日本通運(株)に入社、八年勤務し浄土宗東京教区貞源寺の故藤木芳清師に師事。佛教大学に学び、浄土宗僧階取得。東京教区心光院に約十年勤務。平成十四年に林海庵を設立し、翌年浄土宗寺院に承認され住職となる。現在、浄土宗開教振興協会常務理事。



現在の林海庵

「あのー……インターネットで見たのですが、そこらは浄土宗のお寺ですね」

「はい、そうです」

「来月が父の七回忌に当たるのですが、法要をお願いできないでしょうか」

「あつ、はい。ええと……初めてお電話を頂きましたか」

「そうです」

「菩提寺はおありですか」

このような電話のやりとりが幾度あっただろうか。たいていの場合、「お墓は霊園墓地です」、「菩提寺は?」「ありません」、そして「分かりました、お勤めさせて頂きます」となり、日時の打ち合わせや先方の住所、連絡先の確認、お戒名などの確認へと続いてゆく。

私が住持する寺の場所は東京都下、多摩市というところだ。多摩市では唯一の浄土宗寺院である。

十七年前の平成十七年にこの地に新寺を開いた。

東京都の世帯数はおよそ七二〇万（令和二年）。菩提寺のない世帯がどれだけあるかは分からないが、ご本家が浄土宗寺院の檀家だというお宅が、少なくとも十万世帯以上はあるのではないだろうか。これら菩提寺のない方々の法務需要に応え、お念仏の教えを伝えてゆくのが開教寺院の務めである。

浄土真宗本願寺派ではすでに、昭和三十九年に「東京首都圏都市開教対策本部」を置いている。これまでに五十三の布教所・寺院を設置しているらしい。わが浄土宗では平成十五年に現在の国内開教使制度が、首都圏のみならず、全国の開教に適する地域を対象としてスタートした。私はその一期生の一人となった。

国内開教といっても、一体それは何だろう、と疑問に思う読者も多くおられるであろう。しばし私の体験を聞いて頂きたい。

当時私は、港区の心光院様（以下心光院）に職員として八年間にわたって勤務していた。浄土宗の教師資格取得後、その年に同寺にご縁を頂き奉職することとなった。心光院では寺の仕事を一から教えて頂いた。私はいわゆる在家の出身で、それまでは師僧の元で棚経の手伝いくらいしか経験してこなかった。心光院では初めて卒塔婆を書かせて頂いたり、住職の名代として一人で法事や葬儀をつとめさせて頂いたり、お檀家とも親しくお付き合いをさせて頂いたり、ヨーガの指導をさせて頂いたり（若干の心得があった）と、充実感をもって働いていた。また心光院のご先代は、大本山鎌倉光明寺第百十一世の戸松啓真台下であられる。

台下が心光院のお檀家の法務などでご自坊に戻られたときは、私が維那をつとめ、台下のご法話を間近に拝聴したり、食事を共にさせて頂いたりした。文字通り警咳に接する貴重な機会を頂いて

いた。

ある日その心光院からの帰途、地下鉄の中で偶然浄土宗の宗務庁の課長と一緒にあった。並んで吊り革につかまりながら、課長が言われるには、『国内開教』といつて新しく寺院を建立する事業の話があるのです。笠原さん、やってみませんか。やり甲斐がありますよ。努力の成果がすべて自分のもことになるのですから。」

「国内開教」？ なんとなく夢のある響きだった。ともあれ、翌週宗務庁（当時の浄土宗東京事務所）に伺い話を詳しく聞くことになった。

当時すでに、浄土宗総合研究所が担当して国内開教向けのデータが整備されていた。国勢調査をもとにした全国各地の人口分布や人口の推移、将来予測だ。また宗派別の寺院の分布状況などのデータもあり、特定の地域が開教⇨新寺建立に適した場所かどうかを見ることができた。だが、そ

東京都三多摩マップ



府中四谷橋から多摩市を望む林海庵は左奥

浄土宗の開教担当者との開教地選定の相談では、あきる野市や小平市、多摩市など、東京23区を除く広い地域での検討がされた。同時に検討地域にある浄土宗寺院との兼ね合い、所属する組の支援体制など、多角的な検討が重ねられたという

の時点ではそこから先のことはまだ決まっていなかった。具体的な開教のプロセスを策定したり、予算やタイムテーブルを検討したりといった作業は白紙の状態だったように思う。これはあとで分かったことであるが、浄土宗の新寺建立という例はそれまでもあったが、それはあくまで志ある先輩方が独力で成し遂げてこられたことであって、一宗の施策として本腰を入れて取り組むのはこれが初めてだったのだ。

私は先に書いたように心光院の職員としてやり甲斐のある日々送っていたが、一生同寺にお世話になるわけにもいかない、とは思っていた。国内開教の話は一つのチャンスかもしれない。だがどうやら、すべてを宗務庁に任せればあちらでレールを敷いてくれるということではなさそうだ。こちらはこちらで考えてゆかなければならない。そこで、まず場所を検討するところから始めた。

国内開教Ⅱ新寺建立にもいくつかのパターンが

ある。例えば自己所有の土地や建物があつてそこからスタートされる方もいれば、何もないゼロの状態から始める場合もある。私は後者のケースであつた。当時はアパート暮らしで、心光院に通勤しており、自己所有の資産はなし。開教資金を検討する時はいずれ来るとして、まず場所をどうするか、だ。

宗務との話の中で、東京多摩地区が開教の候補地に挙がつていた。それは良いとして、では多摩地区のどのあたりが良いのか。地図を広げて、既存の浄土宗寺院の場所に印をつけてゆく。いくつもある霊園墓地の場所も調べ、印をつける。

浄土宗寺院の空白地帯はどこか。さらに地域別の人口動態、市街地における平地の占める割合や自治体の財政状況などを調べ、それぞれ地域として発展可能性がどの程度あるのかなども検討した。その結果、候補地は二カ所に絞られた。一つは都立小平霊園付近、もう一つが多摩市付近である。

多摩市は多摩ニュータウンの中心地域にあたり、以前から浄土宗寺院を設置する必要があると言われていた場所だ。私の調査結果もまさに、ここが開教にふさわしい場所であることを示していた。

机上の仮説はともかく、実際はどのようなところだろうか。それまではよみうりランドのコンサートを聴きに行くときしか訪れることのなかった場所だ。開教の候補地として初めて車で回つてみて驚いた。巨大な団地群、整備された広い道路、新しく建てられつつある美しいデザインの大型マンション、緑豊かな美しい丘陵地……。それまで都内の建て込んだ住宅地しか知らなかった私にとつては、まるで別天地のようであつた。(つづく)